

当時の清水市立清水総合病院は整形外科医が4人、外傷を主に年間400件程度の手術をこなしていた。慶應大学の関連病院だったので、小生以外はみんな慶應の医局からの派遣であった。最初は少し疎外感を感じましたが、1か月もするとまわりの先生方のおかげで疎外感はなくなった。院長も整形外科医でしたので、毎月200時間以上の時間外勤務があったのですが、整形外科医であった院長に「すべて申請しろ！」と言われ、時間外は本当に大変だったが、とても助かった。

当時小生はBMWのALPINA C1という車に乗って通勤していたのだが、院長から派手すぎるので、ほかの車で通勤しろ！と言われた。仕方がないので、家内のブルーのマツダファミリアで通勤した。

清水の2年間は200件ほど執刀をした。手術はほとんど外傷で、脊椎や人工関節などの手術はほとんど無く、外傷の手術に明け暮れていた。そのおかげで、いろいろな手術器械の操作を学び、その後の手術医人生の糧となった。高橋先生、いろいろな技術を教えていただき本当にありがとうございました！その技術を村松医師や長女の紅はじめ、当院の医師みんなに伝えているので、ぜひ引き継いでいってもらいたいと考えている。

給料は振り込みではなく、毎月現金で手渡された。12月の給料は基本給・時間外手当・年末調整・ボーナス・がすべて現金で支給だったため、変な話、給料袋が縦に立った。当然奥方はとても驚いていた。寝る間もなく働いた甲斐があった。

年が明け医局長から、「来年もう1年働かないか」と誘われたが、清水では脊椎や、関節などのコールド・サージェリーがほとんどなく、小生が行った頸椎の前方固定1件と、腰椎の除圧術1件のみでした。小生はコールド・サージェリー(※1)を学びたかったので、出張は1年で大学に戻ることを選択した。

大学に帰ると、3年目で主治医となり自分の患者さんを何人か持たなくてはならなくなりました。当時、外傷・関節班に配属され、いきなり20人の患者さんの主治医を任され大変な状況であった。毎週水曜日のカンファレンスは意見が飛び交い、いつも午前さまだった。関節班の手術は定期で2~3件、その後緊急の外傷の手術が2~3件あったため手術終了はいつも病棟の消灯後だったから、懐中電気を持って受け持った患者さんの回診を行っていた。起こされる患者さんもたまったものではなかったと思う(ごめんなさい!)。したがって、夕食は豊明のお店は閉まっていて、いつも八事の味仙に通っていた。

当時、関節班で一緒した宮下先生には大変お世話になった。宮下先生には小生がアメリカに留学した1年間、小生の実家の病院もほとんど一人で維持していただき、大変感謝している。現在は奥さまのご実家の新居浜にある病院を任されて、介護事業も含め大変ご活躍されている。

小生は大学院に入り、腰椎後根神経節の血流に関する研究をした。犬の神経根の血流を水素クリアランス法で測定するのですが、大学5年目の研究専従期間には100匹程度の犬にお世話になった。おかげで医学博士の称号を得ることができ、本当に感謝している。

※1・慢性疾患などに行う計画された手術のこと。反対に外傷など緊急性がある手術は「ホット・サージェリー」と呼ぶ。

(2024年5月14日)